

【第11講】

文章の読み直しについて

文章を書いたときに、読み直しをしない人はいないと思います。しかし、正しく読み直しをしなければ、何度読み直したところで全く意味がありません。「達意の文章が書ける人」とは、「文章を正しく読み直せる人」でもあります。明細書書きにとって正しく読み直せることは、それほど大切です。

文章を書くときには、頭の中にあることをどのようにして表現するか意識が集中します。これは当然のことです。「書く」ということはそういうものだからです。

では、自分で書いた文章を読み直すときにはどうするか？

多くの人は「書く」作業の再確認になってしまうのです。つまり、先ず始めに、その文章を書く際に、頭の中にあったイメージを思い出します。その後、そのイメージが文章に現れていることを確認します。この際には、これまで説明してきた多くの注意事項についても、正しく考慮されていることを確認します。そして、問題があれば修正します。

しかし、これでは全く読み返しにはなりません。何故かという、読み返しは、自分の書いた文章を、読み手の代わりに自分が読んでみて、正しく伝わるか否かを判断するために行うものである筈なのに、実際にやっていることは「読む」ことではなく、「書く」ことになってしまっているからです。

「読む」という作業は、何も知らない状態から始めて、一文を読む度に、一つずつ情報を取得することによって、書き手の頭の中にあったイメージを自分の頭の中に再構築する作業です。この情報の取得および再構築がスムーズに行く状態が、我々の目指す文章です。だったら、読み直す際には、そのような立場で読み直すことは当然のことです。ところが多くの書き手は、全体像が頭の中にある状態で、一文を読む度に、この情報はココ、次の情報はアソコと、既に組み立てたことがある（従って完成状態を知っている）ジグソーパズルを、もう一度組み立てるようなことをしてしまいます。また、一文が表す情報にしても、自分が何を言いたかったのかが分かっている状態で読むので、初めて読む人には意味が通じないことにも全く気が付きません。これでは、読み直していることにはなりません。

読み手は、何も知らない状態から文章を読みます。そして読み手は、書かれた単語が表す意味しか読み取ることができません。このことを自覚すれば、一つ一つの単語の選択に注意を払わなければいけないことに気が付く筈です。だって、読み手にとっては、それが唯一の手懸かりなのですから。また、一文一文についても、自分の意図を正しく表しているか否かに注意を払わなければいけないことに気が付く筈です。だって、意図が読めない文章に出くわしてしまったら、読み手は頭を抱えるしかなくなるのですから。更に、文と文との繋がりについても、もっと注意を払わなければいけないことに気が付く筈です。だって、読み手は、文と文との繋がりを踏まえて初めて、何かを理解することが可能となるのですから。

実は、ここまでの各講で説明してきた全てのことは、上に書いたことを実現するためのヒントでしかありません。ヒントに挙げられた全ての事項に配慮したからと言って、上に書いたことが実現できているとは限りません。ですから、結局は、自分の書いた文章を正しく読み直して、問題があれば修正し、修正した文章をまた正しく読み直してみる。これを繰り返す以外には道は無いのです。